

平成元年度 第2回 日田もりビジョン推進検討委員会

日 時 令和元年 11 月 7 日(木) 午前 10 時
場 所 日田市役所 7 階大会議室

1. 開 会

2. 市長挨拶

3. 委員長挨拶

4. 議 題

(1) 日田もりビジョン見直しの骨子(案)について

- ・ 施策体系の変更(案)
- ・ 重点施策の見直し(案)について
- ・ 国県の動向、市の現状と課題、施策体系の見直し(案)
- ・ 数値で見る取組状況(更新分)

(資料2 説明略)

各資料説明略

【質疑・応答】

城戸委員長

今回、第2回目ということでビジョン改訂の全体像が明確になっている。全体を通しての資料説明だったが、どの部分からでも構わないので意見をいただきたい。

B委員

現行ビジョン策定から4～5年が経過している。今回は、その変化を捉えた意義ある改訂になっているのではないかと。林業・木材業界、またそれを取り巻く環境がどのように変わったかと言えば、産業としての「孤立」が進んだ。他の産業と比較して、林業・木材産業は特殊な環境にある。災害については、以前は台風がメインだったが、線状降水帯で洪水が起きるようになり、洪水対策が必要になった。データ測量でデジタル情報として山を捉えるのは良い取組である。せっかくなら、平面ではなく立体で山を捉え、林業のイノベーションで山の高度な利用を行う。レーザー計測で、わさび栽培ができる箇所の特定など、林産利用の掘り起こしにも利用してもらいたい。

最近、佐伯広域森林組合の視察に行ったが、同組合は循環利用を考えた山主のための業務をしていると感じた。日田市の組合は、「山主の利益のために」を一番に、商売として熱心に取り

組んでいる。日田市ではそのような「商売」の素地が残っている。そのような中、ビジョンの改訂内容は、前向きかつ戦略的な内容となっている点を評価したい。

ビジョン改訂後さらに5年経てばもっと状況が変化するだろう。孤立化する林業・木材産業ではあるが、民間と行政がともに汗をかきながら、成長産業化させて行くというのは良い方向である。

D 委員

今回の改訂の大きな背景とし「森林経営管理制度」「森林環境譲与税」の創設がある。それらを踏まえて、日田市の今後の林業の育成を考えた記述になっているので、概ね内容は良いのではないか。ただ、気になる点としては、「生産林」「環境林」の2区分に分けて考えるとのことだが、その区分とは別に、里山に近いような小規模所有者の林地で、面積が小さく林業がしにくいところが増えている。そのような林地の取り扱いも考えて行く必要がある。もう1点は、国、県、経済界の動向（資料1 p8）の中で、SDGsの記載を検討した方が良いのではないか。

G 委員

委員ではあるが、事務局の立場でもあるのでコメントしたい。SDGsの記載については、文言の整理で事務局でも悩んだ箇所だ。日田市は総合計画の基本計画を、SDGsの17の項目に沿って何らか見直すと聞いている。その整理の方向によっては、このビジョンでも記載が必要になるかもしれない。委員会での了承がとれれば、国の動向は記載しても良いかと思う。

城戸委員長

一般的な動向としてSDGsは大きな動きなので、何らか記載があった方が良いでしょう。

E 委員

第1回の委員会で改訂の背景・方向性を整理してもらった。現行のビジョン策定後5年間での変化としては、森林経営管理制度の導入、九州北部豪雨、全国的な豪雨災害があり、「林業成長産業化」の中には、主伐促進とそれに伴う再造林徹底が含まれている。このような変化を踏まえて、ビジョンをどのように改訂するかをまとめてもらっている。

一方、この5年で達成できているものの、新たな課題が生じている項目もあるのではないか。例えばだが、現行の重点施策(3)-2の「産業観光プログラム」では、既に日田もりツアーの体制ができているかもしれないが、実際の実績はどうかかなどだ。ビジョン全体的に、変更がない部分についても現行ビジョンの文言のままでよいかは、もっと精査が必要だろう。なお、細かい修正部分については、別途お伝えしたい。

城戸委員長

これまでの意見をまとめると、現行ビジョン策定後5年間の変化への対応については、委員より概ね了承をいただいた。重点施策について何か意見があれば伺いたい。

C 委員

現在国も進めている「イノベーション」については、機械化や省力化についての記述が現状を述べるにとどまっている。新しい動きとしては、ようやく IT 関連の人たちが林業に目を向けてくれるようになってきている。そのような IT 化についても記述があると、今後に向けた前向きなビジョンになるのではないかと。

城戸委員長

ICT の活用については、今後5年間でできそうなことや、市として取り組みたいことを盛り込んでも良いのではないかと。観光についての話題も出たので、観光・交流に対する森林空間の利用などに対する、市の捉え方を改めて説明いただきたい。

事務局

別紙②に記載しているが、観光産業プログラムによる交流人口は増えている。トライウッドなどをはじめ、各方面でご協力いただいている。委員の意見を踏まえ、産業観光については、担当課と検討したい。

城戸委員長

市長の打ち出す「山業^{さんぎょう}」には、森林空間の有効活用が含まれるので、森林空間の活用が既に施策として打ち出せる環境にあるのか、今後検討が必要なのかなど、ビジョンにおいてはニュアンスがわかるようになれば良いと思う。

D 委員

私は産業観光の委員にも就任しているが、森林組合として観光客の受け入れも行っている。山側の産業観光として、現場を見学したいとの問い合わせが多い。しかし、見学できる現地を探すのは難しい。パワーポイントを使っての山の状況の説明や、原木市場、製材所の見学などは可能だが、それ以外にも林業を行っている山を見たいという希望が多い。しかし、その環境が整っていない。例えば、市有林で見学できるところを整備してもらえれば、そのような要望に応えることができ、産業観光につながると思う。

J 委員

現行ビジョン p59 の日田もりツアーの記述に「都市圏住民への情報発信」とあるが、これらのツアーを実際に行う予定で、日田市外の人への情報発信ということか。

G 委員

現行ビジョン策定に携わったのでコメントするが、この日田もりツアーは、日田市内では例えばこのようなツアーの造成が可能ではないかという「例示」として示したものである。この通りにビジョンとしてツアーを造成するということではなく、関係者に対してセミナーなどを開催しながら、産業観光を推進していくという方向性である。

城戸委員長

重点施策として民間に産業観光を促すという位置付けだと思う。

F 委員

木協でも、施主を対象とした森林ツアーを開始した。森林組合などの協力を得ながら、一泊で、実際に山に行って伐採も体験してもらった。次の日は、木協で家づくりのアドバイスをを行った。しかし、このようなツアーは費用がかかる。問い合わせで多いのは、ツアーの1つの視察先として、日田杉資料館を入れたいという人が多い。じっくり見ると時間はかかるが、短時間で見る程度だと20分で、視察の時間にちょうど良い。その問い合わせは増えている。

城戸委員長

観光資源と林業・木材産業の両方があるまちというのは少ない。その強みを活かして、観光客が豆田に来たついでに、基幹産業である林業・木材産業にも触れることができるというのは大切である。しかし、そのような取り組みに力を入れすぎて、現場が疲弊するのは本末転倒で、関係者ができる範囲で継続していくことが重要である。産業観光は、日田のポテンシャルを活かせる分野なので、強調できる部分は強調しながら、そのままいけるところもビジョンに残した方が良い。

I 委員

今回の追加事項として早生樹の促進があるが、具体的な利用方法が明確にならないと、植栽は進まないのではないかと。林工に「ユリノキ」の加工の依頼があったが、実際に加工してみると非常に利用しにくかった。

事務局

早生樹については、林業成長化産業の取り組みの一環で「高付加価値化の商品開発」として実施している。市有林のユリノキを切り出して乾燥しており、これから市内の家具企業に試験製作をお願いするところだ。

城戸委員長

早生樹については、利用方法が明確になっているのではなく、利用方法も含めて調査・研究段階ということだ。

事務局

利用においては、資源量の把握も必要になる。

B 委員

市内の木工所が、所有山林に植えているユリノキを伐りに来ており、天板での利用を検討しているとのことだが、他の利用方法は検討が進んでいない。

城戸委員長

利用方法の開発が進んでいないのであれば、それをチャンスとして、どこの地域よりも早く活用方法を見極めて製品化することも重要である。地道な調査研究が求められる。

事務局

具体的な利用方法の検討については、成木としての量が必要となる。ビジョンは川上から川下までを網羅しているが、植栽から成木まで何十年とかかる川上の部分と、利用、商売につなげるという川下部分を整理して、並記するのは難しい部分もあるかもしれない。利用可能性を広げるためにも、新しい樹種、回収が早い早生樹種の取り組みについては、民地に下ろす前に、市有林で試験的に取り組んでいけたらという思いで盛り込んでいる。

K委員

国有林では、早生樹のコウヨウザンを植えた。合板にしたが、ヒノキよりも堅い印象である。マーケティングがオープンになっていないので、利用は合板止まりである。大川市では家具への利用ということで、センダンの加工組合ができており、熊本をはじめセンダンの植栽の機運が高まっている。宮崎はコウヨウザンの植栽が進められているが、ウサギとシカの食害があるとのことである。大分森林管理署では、県の指導でチャンチンモドキを植えた。昨年20cmのポット苗を植栽したが、今年、平均110cm、最大170cmまで成長している。試験地の植栽密度は3,000本/haだが、お互いの木が影響することなく成長している。3ヶ月ごとにデータをとっているが、来年度は、樹高3mくらいまで成長すると予想している。雌雄異株なので、雄株、雌株どちらの方が適しているのかなど、特性を見極めていきたい。

レーザー測量については、大分森林管理署が報告しているが、小面積の崩壊地や作業路網などが等高線で現されている。過去の地滑りや山崩れも判読できるため、路網を作る際に、レーザー解析を利用することは重要である。解析ソフトもあり、架線集材の際、どこに支柱を立てるかなど、レーザー測量は、地面の高さがすぐにわかるので、架線の限界の長さのたたき台ができ、机上での計算ができる。現場での測量前に判断できるのでコストが下がる。予算があれば5年ごとに解析を行って山の様子を把握してほしい。

城戸委員長

林業の「サイエンス化」として、キャッチアップしていく必要がある。現行ビジョンの策定時は、時期的なこともありバイオマスが盛り上がっていた。いろいろな議論はあるが、バイオマス発電所ができたおかげで主伐が増え、その後の再生林をどうするかということで、早生樹の植栽という流れだと思う。早生樹のバイオマス利用は考えられるのか。

K委員

発電所を設置した大手の林業会社の社長と話したことがあるが、スギ・ヒノキについては、バイオマス用よりも2,000~3,000円/m³高いA材、B材を出すついでに出さなければ、バイオマス用の価格帯だけで材を出しても採算が合わないとのことだ。

城戸委員長

そうすると、早生樹もバイオマス用だけでは採算が合わない。

B委員

人口減少の中で、マンパワーの減少を埋めるためには、シルバーパワーの活用、ボランティアの活用が必要になる。高齢者の知恵や力を活用しながら、ボランティアを育成して、市内の人に林業・木材産業の魅力を伝えることが重要だ。ビジョンにおいても、「シルバー、ボランティア」というキーワードを検討いただきたい。

城戸委員長

今、人材の話がでたが、地域の人材が林業・木材産業に就いているのか、後継者が育っているのかなど、日田林工から資料を提供いただいているので、説明いただきたい。

I委員

(資料説明略)

現在、就職する生徒については、給与体系も重要だが、休日の明確化、休みの多さなどへの要望が大きくなっている。市内の事業体にはぜひ改善してほしい。また、林業に対する保護者のイメージが良くない。生徒の中には林業への就職を考え、実習などで現場を見てやる気になっているにもかかわらず、保護者が止める場合もある。

F委員

製材所を経営しているが、ハローワークで募集しても応募がない。新卒を雇用したいが来てくれない。人材不足が深刻で外国人研修生を雇いたいという現状がある。

H委員

人手不足が深刻とのことだが、当社は、2年前から、設立当初より目標だった完全月給制を導入した。その影響もあってか、今年に入ってから合計3名入っており、来年は2名の内定が決まっている。

B委員

製材所は外国人研修生の受け入れの資格がないが、全木連が資格取得に向け動いている。

城戸委員長

研修生については、ビジョンに盛り込む内容ではないかもしれないが現状把握は重要だろう。また、月給制にしてから雇用が増えたとのことなので、給与体系はできる限り月給制にすることが重要である。また、最近の若者は給与よりも、休みを重視する傾向にある。連休、年間の休日数も重要で、休日を明確に示すことが大切。大分県では、10連休取得を導入した途端、雇

用が増えた旅館もある。実際に現場で取り入れるのは難しいかもしれないが、人材の確保においては重要なことである。

「山業^{さんぎょう}」の記述については、現在の箇所への記載で良いのかどうか検討が必要と感じている。記載内容、記載箇所については、一旦委員長と事務局に預らせてもらい、検討内容を次回委員会で報告したい。

5. 今後のスケジュール

事務局

次回の、第3回委員会は12月13日10:00に開催予定である。また、第3回委員会を経て、改訂版ビジョンの骨子が固まり次第、パブリックコメントを実施する。第4回委員会は2月に予定しているが、パブリックコメントの内容を反映した素案について最終審議をいただきたい。

城戸委員長

他に意見がないようならば、これにて終了したい。活発な議論をいただきありがとうございました。

6. 閉会

事務局

これをもちまして、本日の委員会を終了いたします。ありがとうございました。

以上